

佐賀・牟田口遺跡

- 1 所在地 佐賀市金立町大字薬師丸字牟田口
- 2 調査期間 二区 二〇〇〇年(平12) 一〇月～二〇〇一年二

月

- 3 発掘機関 佐賀市教育委員会
- 4 調査担当者 楠本正士・三代俊幸・中野 充
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(佐賀)

牟田口遺跡は標高三m程の沖積低地に立地する遺跡で、巨勢川や黒川、市ノ江川の合流する地点にあたる。佐賀導水事業に伴う発掘調査を一九九九年から二〇〇一年にかけて実施した。遺跡は鎌倉時代から近世までの複合遺跡であるが、その主体となるものは、鎌倉時代から室町時代までの集落跡である。

検出した遺構は、掘立柱建物、井戸、土坑、溝などである。

木簡は、二〇〇〇年に発掘調査を実施した調査区(二区)において検出した溝SD二〇〇六から出土した。溝の埋没時期は、出土遺物から鎌倉時代後期と考えられる。溝SD二〇〇六は、牟田口遺跡で検出した遺構の中で最も古い時期に相当するが、調査区内では溝の一部分しか確認できないため、その規模や形状について正確に知ることができず、性格は不明な点が多い。ただ、埋没後の鎌倉時代後期から室町時代前期までには、溝SD二〇〇六に区画された土地に掘立柱建物群が営まれ始め、中世末まではほぼ継続的に開発が行なわれていることから、この溝は、当遺跡周辺の開発開始の時期や様相を考える上で貴重である。

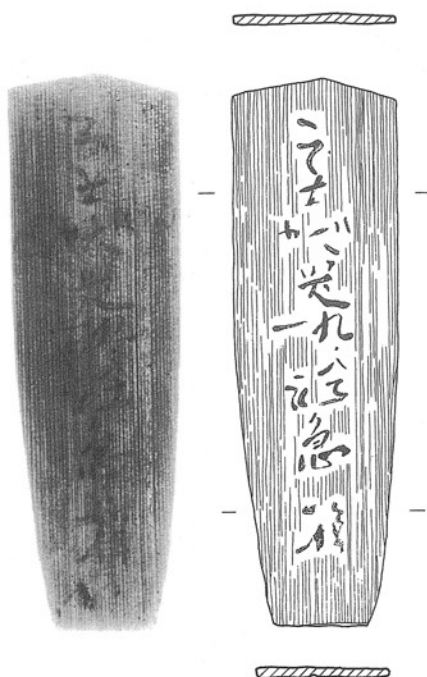
また、溝SD二〇〇六からは木簡のほかにも比較的豊富に遺物が出土しており、中でも人形や下駄、堅櫛の形状をした木製品や、内底部に印花文の刻印を有する土師器の杯などが出土しており注目される。

8 木簡の釈文・内容

(1)

「
天_一天_二天_三天_四天_五天_六天_七天_八天_九天_十天_{十一}天_{十二}天_{十三}天_{十四}天_{十五}天_{十六}天_{十七}天_{十八}天_{十九}天_{二十}天_{二十一}天_{二十二}天_{二十三}天_{二十四}天_{二十五}天_{二十六}天_{二十七}天_{二十八}天_{二十九}天_{三十}天_{三十一}天_{三十二}天_{三十三}天_{三十四}天_{三十五}天_{三十六}天_{三十七}天_{三十八}天_{三十九}天_{四十}天_{四十一}天_{四十二}天_{四十三}天_{四十四}天_{四十五}天_{四十六}天_{四十七}天_{四十八}天_{四十九}天_{五十}天_{五十一}天_{五十二}天_{五十三}天_{五十四}天_{五十五}天_{五十六}天_{五十七}天_{五十八}天_{五十九}天_{六十}天_{六十一}天_{六十二}天_{六十三}天_{六十四}天_{六十五}天_{六十六}天_{六十七}天_{六十八}天_{六十九}天_{七十}天_{七十一}天_{七十二}天_{七十三}天_{七十四}天_{七十五}天_{七十六}天_{七十七}天_{七十八}天_{七十九}天_{八十}天_{八十一}天_{八十二}天_{八十三}天_{八十四}天_{八十五}天_{八十六}天_{八十七}天_{八十八}天_{八十九}天_{九十}天_{九十一}天_{九十二}天_{九十三}天_{九十四}天_{九十五}天_{九十六}天_{九十七}天_{九十八}天_{九十九}天_{一百}」
[律令カ]

234×71×5 011



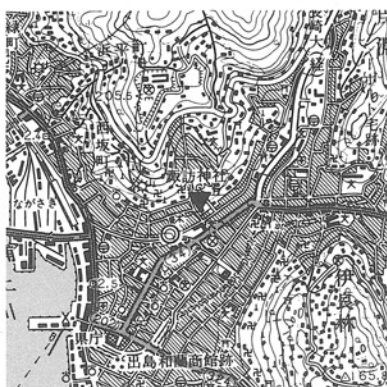
二〇〇三年

9 関係文献

木簡には、上位から「天冠」と上下左右対称に記され、中位には上下対称に「九九八十一」と書かれ、下位には「急々如律令」と思われる墨書がみられる。形状は、長方形の材の一端を山形に尖らし、下端は平らに仕上げ、側縁左右裾をカットして幅狭に成形している。なお、釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、山本崇氏のご教示を得た。

佐賀市教育委員会『牟田口遺跡』（佐賀市文化財調査報告書一四〇、

（中野 充）



（長 崎）

長崎・杵粕町遺跡（長崎奉行所立山役所跡）
ろかすまち

- 1 所在地 長崎市杵粕町
- 2 調査期間 二〇〇三年（平15）四月～六月
- 3 発掘機関 長崎県教育委員会
- 4 調査担当者 川口洋平・柚木亜貴子・平田賢明
- 5 遺跡の種類 奉行所跡
- 6 遺跡の年代 近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は長崎市街北部にあり、長崎奉行所立山役所跡の南側に接している。主体となる年代は、一六世紀末から一七世紀前半までで、

銅の精錬に関する炉跡や埴塼などが確認されている。さらに、長崎奉行所との境付近で幅約5m深さ約一・五mの東西に延びる溝が検出され、木簡を含む多数の木製品が出土した。溝は、確認された位置や出土遺物の内容からみて、長崎奉行